

# 共感者としての Gaskell

*Mary Barton* と“Lizzie Leigh”<sup>1</sup>

多比羅 真理子

## (1) 代弁者としての Gaskell

1848年作家としてデビューを飾った Gaskell は長編小説 *Mary Barton* において、労働者たちの実状をありのままに世の人々へ伝えること、労働者たちの苦難の代弁者となることを自らの使命とした。この彼女の思いを序において以下のように述べている。

I know nothing of Political Economy, or the theories of trade. I have tried to write truthfully;<sup>2</sup>

*Mary Barton* では、副題を *A Tale of Manchester Life* として工場労働者の John Barton を軸に彼の周辺労働者たちの日常生活が描き出されている。その様子は、1845年、ロンドン・マンチェスターを中心にドイツの Friedrich Engels が詳細に調査し発表して19世紀のイギリス労働者たちの優れた生活史とされる *Die Lage der arbeitenden Klasse in England* (『イギリスにおける労働者階級の状態』) で語られた事実と正に内容を同じくしている。その一例として、*Mary Barton* の第六章「貧困と死」では、熱病に罹り死に瀕する工場労働者 Davenport の様子を描写している。Davenport 一家の住む家は光もささない地下室で、悪臭が充満し汚水で湿気ている。粗末で最小限の家具しかない暗い部屋には子供たちが寄り添い、高熱に苦しむ父親をなす術もなく母と共に見つめるだけである。これは、正に Engels が先の著書の「大都市」の章で述べているマンチェスターの貧民の生活と全く同じである。これは、Gaskell が当時の労働者の生活をつぶさに観察し、正確に描写していた事を示すものである。その意味で、*Mary Barton* で「労働者たちに代わって彼らの苦境を語り」、「できるだけ真実の

ままに描く」語った彼女の目的が十分に達成しているといえよう。

1849年、Gaskellは友人のEliza Foxへ次のように書き送り、彼女が書きあらわす事柄をいかに真実に近づくよう試みたかが伝えられている。

I told the story (*Mary Barton* : 筆者注) according to a fancy of my own; to really SEE the scenes I tried to describe, (and they WERE as real as my own life at the time) and then to tell them as nearly as I could, as if I were speaking to a friend over the fire on a winter's night and describing real occurrences.<sup>3</sup>

このように彼女が描きだす真実に裏付けられた社会や労働者たちの姿に感銘を受けた一人に、Charles Dickensがいた。1850年、次のような手紙をGaskellに送り、彼が発刊したばかりの*Household Words*に寄稿を強く要請した。

'...there is no living English writer whose aid I would desire to enlist, in preference to the authoress of *Mary Barton* (a book that most profoundly affected and impressed me)'<sup>4</sup>

その結果同年3月に発表されたのが、短編“Lizzie Leigh”である<sup>5</sup>。*Mary Barton*で果たした登場人物たちの「代弁者」としての姿勢がこの作品でも引き継がれている。

この物語は、人々がイエス・キリストの誕生を祝うクリスマスの日、長年農業を営むLeigh家の主人Jamesが亡くなる場面から始まる。Jamesと妻のAnneの長女で、この物語の題名となっているLizzieが、奉公に出たマンチェスターで都会の欲望に足をすくわれ身ごもり、奉公先を追い出される。Jamesの亡き後母親のAnneは、行方の分からない、恐らくは売春婦に身を落としたと思われるLizzieを、マンチェスターに居を移して探し出す。

まず最初にJamesとAnneの夫婦関係をGaskellは次のように語る。

They had been two and twenty years man and wife; for nineteen of those years their life had been as calm and happy as the most perfect uprightness of the one side, and the most complete confidence and loving submission on the other, could make it. Milton's famous line might have been framed and hung up as the rule of their married life, for he was truly interpreter, who stood between God and her; (206) <sup>6</sup>

家庭において夫は絶対的な権力を有し、妻は夫への完全な服従が求められている。つまり、当時のイギリス中産階級の女性たちに求められた理想的女性像「家庭の天使」の概念が中産階級のみならず、Leighのような農家にあっても、浸透している様子がこの夫婦の関係から読みとれる。

次に物語には Lizzie が産んだ子供 Nanny を姪として偶然育てることとなった女性で、後に Lizzie の兄 William と結婚する美しい Susan Palmer が登場する。突然赤ん坊を Lizzie から託されて育てることとなった Susan だが、彼女は先ず父親に赤ん坊の養育の許しを求める。父親は「自分が生活を楽に送れるのであれば」(224) という条件を出す。この父娘の関係には、かつては商売を華々しく営んでいたが失敗し、現在は生活力が全くないにもかかわらず、自分の意の通りに娘を支配しようとする父親の姿が存在する。Gaskell の詩を掲載した機関誌の発行者で作家の William Howitt の妻 Mary は自伝の中で「父親に異を唱えることはもってのほかであり、女性たちは父親に従う存在であった」<sup>7</sup> と当時の父親と娘の関係を述べたという。従って、Susan が、名ばかりではあるが現在も家長である父親に従い、また夫 James が亡くなった後、Anne が長男の William に、マンチェスターへ Lizzie を探しに行く許可を求めていること(213) もこうした家庭概念から判断すれば当然の行為であった。このように「幼いときは親に、嫁しては夫に、そして老いては息子に従う」という当時の家父長制下にある弱い立場に立たされている女性たちの存在が作品の中に明確に描き出されている。

つぎにこの作品の大きなテーマとなる Lizzie の転落についてである。

Gaskell はこの問題を *Mary Barton* で、Mary の叔母の美しい Esthur の転落の様子とその後の生き方を詳しく描いた。そして“Lizzie Leigh”と同年 1850 年 11

月に同じく *Household Words* に発表した短編 “The Well of Pen-Morfa” の中で、さらには 1853 年には長編 *Ruth* で主人公 Ruth の転落と更正を取り上げた。これはこの時代、転落の道を歩む女性たちがいかに多く存在し、ギヤスケルが彼女たちに強い関心を寄せていたかが伺える<sup>8</sup>。時代の繁栄の犠牲者である労働者と同様、男性の犠牲となり世の片隅に追いやられて苦難の道を歩まざるをえない娘たちの実像を、そして彼女たちを生み出した社会をギヤスケルは強く世に問いたかったに違いない。

“Lizzie Leigh” では奉公先の雇い主から彼女の過ちを伝えられた後、父親 James は Lizzie を亡き存在として見なし、以後いついかなる時も家庭内で彼女の名前を挙げることを禁じた。このような対応は転落した娘に対する当時の世間一般の見方であった。更には、世の娘たちには、道を誤まることのないように、また娘としてのあるべき姿や生き方そして純潔さの大切を教える道徳的、かつ教訓的な意味合いを含ませた絵画や書物などを使って啓蒙、教育が行われていた<sup>9</sup>。Gaskell が “Lizzie Leigh” を発表した翌年 1851 年、Richard Redgrave は絵画『追放』を発表している。この絵画には身ごもり、赤子を産んだ未婚の娘が家に戻ってきたことに父親は怒り、寒風吹きすさぶ夜、その娘と赤子を父親が家から追い出す状況が描かれている。厳しい表情の父親とは対照的に悲しみ嘆く母親や姉妹たち。途方に暮れる兄、弟。これは正に “Lizzie Leigh” で描かれた、父 James の姿である。従って、James が Lizzie の過ちを赦さなかったという設定は決して特殊なものではなく、その時代の人としての当然の、理にかなった行為であったということが、この一枚の絵を通して推察できる。また、転落が理由の如何に関わらず、道を踏み外した女性や娘たちは「恥」という意識のもとに、切り捨てられ追放されるという状況を伝えるのが、D.G.Rossettie の「発見」である。この絵は 1853 年に描かれたとされる。行方不明となった娘を売春婦たちが行き交う通りを毎晩捜し回る Anne のように、この絵の中の若者が恋人をやっと探し当てた時、彼女は我が身を汚れた存在として、顔を背ける。彼女の体全身からは、後悔と悲しみとやるせなさなどが伝わってくる。Lizzie も、やっと巡り会えた母親と交わした最初の言葉は

“Mother, don't look at me! I have been so wicked!” and instantly she hid her

face, and groveled among the bedclothes, and lay like one dead. (239) (下線部筆者)

であった。そして、Susanに預けた子どもNannyが階段から落ちて亡くなった場に、身を売って得たお金を届けにきたLizzieが遭遇する。その時彼女はSusanに向かって「わたしはあの子に触れる価値がない。とても汚れているから」と語る。(233)

このように、転落した娘たちに対してだけでなく夫婦関係や親子関係を含めて、女性たちがどのような存在であったかをありのままに伝えた。その意味でGaskellは「社会の代弁者」としての役割を“Lizzie Leigh”の中でも確実に果たしている。

## (2) 共感者としてのGaskell

時代の規範を体現する存在として登場するJamesは死の床で「あの娘を救すよ」(206)という言葉を発表した。娘の幸せを願って都会に奉公へ出したのだが、その結果は転落という最悪の道をとる。しかし、彼の潔癖さと融通性のない頑固さが娘への愛を明らかにすることを妨げていた。しかし死を目前にして初めて娘への気持ちを素直に表す。道を誤ったLizzieがたどった道、彼女が経験したであろう様々な苦難に対しての深い憐憫の情が娘への救しを与えたのである。彼の救しの言葉は「道を踏み外した娘」に対しての世の価値観からの彼が逸脱したことを意味する。これは、価値観に縛られることなく、人として相手の苦しみを理解し、その人を思いやり、その人の心に自分の心を重ねて初めてなされる事、つまりsympathyという深い思いやりと共感の感情があって初めてなされるのである。Gaskellは*Mary Barton*の序で

I had always felt a deep sympathy with the care-worn men, (lxxix)

と述べて労働者たちの苦難の代弁者としてあるだけでなく、彼女の使命の中に彼らに対する共感を含めている。

*Mary Barton*での最も重要な場面、自らの意志からではないが、組合員として

工場主 Carson の息子を殺した John Barton と、息子を殺されたことで激しい怒りと憎悪とで一杯の父親 Carson が相対峙する場面がある。(424 ~ 426)

“And have I had no suffering ?” asked Mr.Carson, as if appealing for sympathy, even to the murderer of his child. ...

The eyes of John Barton grew dim with tears. Rich and poor, masters and men, were then brothers in the deep suffering of the heart ...

The sympathy for suffering, formerly so prevalent a feeling with him, again filled John Barton's heart, (425) (下線部筆者)

Barton の息子 Tom は、Barton が失業中に餓死している。Barton にとっては、Tom を殺したのは他ならぬ Carson を代表とする雇用者に他ならない。しかし、Barton は自分の前に息子を失い失意のどん底に沈む一人の老人カーソンの姿を見て、彼を常に労働者と対立し、自分たちに苦しみだけを与える雇用者としての憎しみの対象としてしか、理解してこなかったという事実に衝撃を受ける。一方 Carson も Barton の心を良く理解する老職工の Job Legh から、Barton が息子を殺した理由を告げられ、労働者出身の自分こそが一番彼らの心を理解しうる立場であるべきなのに、彼らに対する sympathy を置き忘れていたことを思い知らされる。そして、彼は労働者たちの心を理解しようとする。この時、雇用者 Carson と労働者 Barton の間の対立構造が崩れ去り、同じ悲しみを抱く人間であることを認識し、互いの悲しみを理解する。

“Lizzie Leigh”でも、Lizzie の行為に対して怒りと恥辱感で一杯の兄の William に、Anne から事の顛末を聞いた Susan は次のように懇願する。

“Yes, I know all, — all but her sufferings. Think what they must have been!”

He made answer, low and stern, “She deserved them all; every jot,”

“Oh!” she said, with a sudden burst, “Will Leigh! I have thought so well of you; don't go and make me think you cruel and hard. Goodness is not goodness unless there is mercy and tenderness ... (238)

Susan は続けて Lizzie を思いやる気持ち、更には、Lizzie だけでなく、子供たちを思う母親 Anne を理解するようにと求める。

“Thou should give me time. I would do right in time. ... I will do what is right and fitting, never fear.” (238)

父 James に似て先ず世の規律に従おうとする真面目な William も恋する Susan の強い願いに動かされ、時間をかけて妹を理解しようと約束する。

John Barton, Old Carson, William たちに作者の Gaskell が求めたのは、何よりも相手を理解する事、そのためには、sympathy という相手への思いやりと、共感の心の必要性だった。こうした気持ちがあれば、様々な苦難、諍い、衝突は回避され、よりよい方向へと導かれるという作者の強い姿勢が、この Susan と William との会話の中に集約されている。

また、物語では Lizzie の転落の詳しい事情は一切語られていない。それは作者の視線は転落した者の現在と将来へと向けられてからである。ギヤスケルは Lizzie に、それまでの辛く悲しい経験を糧に、彼女と同じように悲しみを抱く人への共感者としてその後の人生を送らせる。

Mrs. Leigh and Lizzie dwell in a cottage so secluded that, until you drop into the very hollow where it is placed, you do not see it. ... every call of suffering or of sickness for help is listened to by a sad gentle-looking woman who rarely smiles ... (241)

ギヤスケルが真実をあるがままに語る「社会の代弁者、苦しむ人々の代弁者」の役割から、一步踏み出し「共感者としてあること」の大切さを伝えたのだった。そして Gaskell が Lizzie に授けた更正の道は次作の長編 *Ruth* へと引き継がれることになる。

### (3) 共感することの大切さ

“Lizzie Leigh”と同じ時期、彼女は多くの短編を *Household Words* に発表する。そこには様々な状況の主人公 - 身体に障害のある人、精神に障害のある人々、社会の底辺で働く人々、弱者の立場に追いやられた女性たち、そして彼らを支える人々が登場する。これらの作品に共通して流れる精神は、他者に対する「共感の心」、「思いやる心」つまり sympathy である<sup>10</sup>。

Gaskell が sympathy をいかに作品の根源としていたのかは、先に挙げた *Mary Barton* の序で明らかにされているが、さらに彼女が作家として名をなし、成功を手にした 1862 年、妻であり、母親である若い作家志望の女性がギaskell に作家としてのあり方について尋ねたときの返事を読むことで一層明確になる。

I could have written stories, because I should have become too much absorbed in my *fictitious* people to attend to my *real* ones. I think you would be sorry if you began to feel that your desire to earn money, even for so laudable an object as to help your husband, made you unable to give your tender sympathy to your little ones in their joys & sorrows; and yet, don't you know how you, — how every one, who tries to write stories *must* become absorbed in them, (fictitious though they be,) if they are to interest their readers in them. ... a good writer of fiction must have lived and active & sympathetic life if she wishes her books to have strength & vitality in them.<sup>11</sup> (下線部は筆者)

この手紙からも読みとれるように Gaskell は作家としてあるがままに語り、つまり真実を語る事に努めてきた。中でも彼女は何よりも他者を思いやり共感する事を登場人物たちに、そして彼女自身にも課したのだった。こうした彼女の共感が作品に人間味を与える事になり、ただ単に現実をありのままに描き、現実の社会の代弁者としての役割を果たす以上に、深い感動を与えることが、両作品からも明らかとなるのである。この共感の姿勢こそ私たちが彼女の作品から学ぶものであろう。



注

1. 本稿は日本ギaskell協会第18回大会（平成17年10月1日）シンポジウム「ギaskellの文学から学ぶこと 代弁者から共感者へ」で口頭発表した内容を中心に加筆したものである。
2. Elizabeth Gaskell, Preface, *Mary Barton: A Tale of Manchester. The Works of Mrs Gaskell*. Vol.1 (London: Smith, Elder & Co., 1906), lxxiv. 以降本作品については本文中に引用頁を記載する。
3. J.A.V.Chapple and Arthur Pollard eds., *The Letters of Mrs Gaskell* (Mandolin, 1997) 82.
4. Graham Storey, Katherine Tilotson and Nina Burgis eds., *The Letters of Charles Dickens*. Volume Six.1850–1852. (Oxford: Clarendon Press, 1988), 21.
5. Jenny Uglow, *Elizabeth Gaskell: A Habit of Stories*. (London: Fber and Fber, 1993) によると、本作品は1830年には書かれていたが、発表は1850年としている。
6. A.W.Ward ed., *The Works of Mrs Gaskell*, Vol.2, “Lizzie Leigh” (London: Smith, Elder & Co., 1906) 206, 以降本文中には引用頁を記載する。
7. Aina Rubenius *The Woman Question in Mrs. Gaskell's Life and Works*. (New York: Russell & Russel, 1950) 5.
8. 実際にGaskellはDickensと共に転落した少女たちの救済、移民運動に当時取り組んでいた。
9. 北條文緒、クレア・ヒーズ、川本静子編『遙かなる道のり イギリスの女たち1830-1910』（国書刊行会、1989）67。啓蒙的意味合いのある書物としては、Mrs Ellisの著書 *Dauthters of England, Women of England, Wives of England, Mothers of England*や、マナーブックの存在があげられる。
10. 拙著『ギaskellのまなざし』（鳳書房、2004年）弱者に対するギaskellの視線を参照。
11. *Letters of Mrs Gaskell*, 694.

